慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	吉本隆明「共同幻想」論への前哨
Sub Title	
Author	石川, 晃司(Ishikawa, Kouji)
Publisher	慶應義塾大学法学部
Publication year	2008
Jtitle	慶應の政治学 政治思想 : 慶應義塾創立一五〇年記念法学部論文集 (2008.) ,p.63- 85
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BA88454709-00000009-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

吉本隆明「共同幻想」論への前哨

石川晃司

一　吉本思想における「共同幻想」論の位置

二　幻想の概念

三　方法としての「自然」

四　個人幻想と共同幻想の逆立

拙稿「吉本隆明の初期思想」[1]で、初期思想という主題に必要な限りで「共同幻想」について触れた。七〇年代までの、いわゆる吉本の主著三冊『言語にとって美とはなにか』（以下『言美』）、『共同幻想論』（以下『共幻』）、「心的現象論」（以下「心的」）については別に稿を用意する心算であったが、事情があってまだ実現していない。もちろん、どの著作も一筋縄ではいかない難しさを含んでいる。小稿では、いずれ正面から論じる「共同幻想」論への前哨として、これにまつわるいくつかの疑問を処理しておきたい。

一　吉本思想における「共同幻想」論の位置

吉本の体系的思想は『言美』によって開始され、『共幻』や「心的」はその延長上に必然性をもって展開された。この間の事情は、よく知られているところだが、『共幻』の冒頭で次のように語られている。

「言語の表現としての芸術という視点から文学とはなにかについて体系的な考えをおしすすめてゆく過程で、わたしはこの試みには空洞があるのをいつも感じていた。ひとつは表現された言語のこちらがわで表現した主体はいったいどんな心的な構造を持っているのかという問題である。もうひとつは、いずれにせよ、言語を表現するものは、そのつどひとりの個体であるが、このひとりの個体という位相は、人間がこの世界でとりうる態度のうちどう位置づけられるべきだろうか、人間はひとりの個体という以外にどんな態度をとりうるものか、そしてひとりの個体という態度は、それ以外の態度とのあいだにどんな関係をもつのか、といった問題である」[2]

著作の系譜でいえば、こうした問題意識のうち、個人の観念に関する分析が主として「心的」で、後者の共同

性の観念に関する分析が主として『共幻』として展開されることになった。（しかし、後年、語られるようにこれらは別個なものではない。事実、『共幻』では個人の幻想と共同の幻想の関係も問題とされている。こうした関係のあり方を問わなければ、問題の切実性が理解されない。）

しかし、共同幻想に対する問題意識は『共幻』のはるか以前にさかのぼる。（さらに云えば、その問題意識は『共幻』以降もさらに拡大されている。）思想にはその個人の切実な体験が投影されざるを得ない。吉本の場合、それは敗戦であった。敗戦によって軍国主義にかぶれていた自分の愚かしさが自分にとって明瞭となった。なぜ、このようなことが自分に起こってしまったのか、その解明をなすことなしには戦後に生きていく根拠を見つけだすことはできない。こうした切実な反省から戦後の吉本の思想的営為が開始されたと考えるならば、共同幻想の分析は最大の課題としてとらえられたはずである。軍国主義は一種の共同幻想に他ならないし、さらにはその背後に控えている共同幻想としての国家が思想的な課題として浮かびあがってきたことを意味するからだ。実際、『共幻』以前に書かれた「マチウ書試論」もこの課題を扱ったものであるし、親鸞論も含めた、その他の多くの宗教論にしても同じである。また、彼の多くの政治論文は「共同幻想」論の立場から導き出されている。吉本が体系的な思想構築に向かった頃からダメになった（逆にいえば、それ以前の吉本の論文は高く評価する）などと主張する向きがあるが、吉本の政治論文は一定の原理的立場から書かれており、その原理の本質的追究が『共幻』に他ならないのであって、「体系的思想以前は評価する、以後は評価しない」といった類の評言はあたらない。[3]「大衆の原像を繰り込む」というのは吉本の有名な命題だが、これとて共同幻想の廃棄との関連で主張されているのであって別個のものではない。[4]今日に至るまで、「共同幻想」論つまり共同幻想に関する考察は吉本思想の最大の課題であり続けている。

『共幻』は吉本隆明の思想本流にある最も重要な著作のひとつであり、また最もよく知られている著作なのだが、

広い意味での「共同幻想」論の一環として書かれている。『共幻』を理解するためには、その裾野として展開された「共同幻想」論のなかにおいてとらえる必要がある所以である。これに対するある程度の理解がなければ『共幻』を理解することはできない。（そういった全体的な関連のもとで、さまざまな概念が問われており、それが吉本の思想を難しくしている。）

彼の思想本流にある著作の多くはこれまで本格的な論議の対象とされてこなかったが、『共幻』はその中にあっては比較的論じられることが多かった著作である。これには『共幻』が吉本の著作の中でおそらく最も影響力の大きかった時期に書かれた著作であり、また最も人口に膾炙した著作であるという事情が絡んでいる。しかし、論議の対象とされても、そこに多くの誤解や無理解がみられることは他の著作についての事情と同じだ。確かにこの著作は難解であり、安易な理解を阻むところがある。この著作について、吉本は「現在さまざまな形で国家論の試みがなされている。この試みもそのなかのひとつとかんがえられていいわけである[5]」と語っているが、国家論の観点から一定のモティーフをもって読んだとしても、正直にいっておそらくその内容を十分に理解することは難しい。ましてや何のモティーフももたずに読めば、たとえその文章の独特の魅力に魅かれて最後まで読み通したとしても、理解は全くおぼつかない。

難しさはどこからやってくるのか。吉田裕は「『言語にとって美とはなにか』がほとんど幾何学を思わせるような展開を示したのに較べると、『共同幻想論』の叙述ははるかに錯綜しており、全体を一個の観点から把握することはずっとむずかしくなっている。ひとつの章は次の章に直接つながっておらず、しばしば重複する。概念は規定されてでなく、検討と生成の途上で使用される[6]」と述べている。『共幻』に内的な体系があるのは確かだが、それが『言美』ほどの明確さをもって語られていないこともまた確かである。また、理解の難しさは、語ろうとしている思想内容の独創性、さらにそれに関連するが使われている独特の用語やそこに込められた内容に起因す

るともいえよう。だが、それ以前に、もっと単純で素朴な次元での難しさ――無理解が存在するようにもおもわれる。例えば、タイトルにもなっている共同幻想という概念、さらには個人幻想や対幻想といった、この著作の中心に位置する概念自体が難解極まりない。『共幻』において、確かに説明はされている。しかし、それだけでは判然としないことも事実である。あるいは、自己幻想と共同幻想は「逆立」すると語られているが、「逆立」とはいかなる意味なのか。あるいはまた、共同幻想はすべからく廃棄されるべきと吉本は語るが、共同幻想を共同性の観念と解釈した場合、それらが全て廃棄の対象になるのか、それでは共同性、あるいは人間の連帯それ自体を否定することになるのではないのか、といったことである。私はすでに幻想という用語、共同幻想、個人幻想、対幻想といった概念について一般的な形で論じているが[7]、以下の小稿では「共同幻想」論に関して個別的に提出された異議や素朴な疑問を検討しておきたい。

二　幻想の概念

「共同幻想論」というタイトルには確かになんともいえない魅力がある。しかし、ここで使われている「幻想」とは何か、何を指しているのか。私たちが幻想という語に対して経験的に思い描く内容と若干ちがっている。

マルクス主義などでいう、いわゆる上部構造（大雑把にいえば観念領域）を指して、吉本は「幻想領域」といっており、上部構造という表現を使わないのは、「既成のいろいろな概念が付着してい[8]」るからだとことわっている。通俗マルクス主義、当時支配的であったロシア・マルクス主義などにおいては、上部構造は土台（下部構造）の反映とみなされ独自の領域とは考えられていないから、吉本としてはそれらと一線を画したいという思いはあったであろう。事実、「幻想領域を扱うときには、幻想領域を幻想領域の内部構造として扱う場合には、下部構造、

経済的な諸範疇というものは大体しりぞけることができる」[9]という前提の下で『共幻』を展開している。既に『言美』で、社会経済的な範疇から独立に一種の運動法則が文学（表現としての言語）には成り立つことを論証しているし、マルクス主義的な唯物論（タダモノ）については批判しつくした後で『言美』も『共幻』も書かれているのである。

もうひとつある。いわゆる土台＝上部構造決定論という手あかだけでなく、下部構造、上部構造という概念それ自体が特殊マルクス主義であって手あかが付いているようにおもえる点である。吉本は土台（下部構造）と上部構造という腑分け自体の有効性を、上部構造という括り方自体の有効性を評価している。その有効性をマルクス主義とは別個に賦活せしめようとするとき、従来の手あかのついた上部構造という表現を避けようとしたのはあたりまえである。

吉本は「いままで、文学理論は文学理論だ、政治思想は政治思想だ、経済学は経済学だ、そういうように、自分の中で一つの違った分野は違った範疇の問題として見えてきた問題があるでしょう。特に表現の問題でいえば、政治的な表現もあり、思想的な表現もあり、芸術的な表現もあるというふうに、個々ばらばらに見えていた問題が、大体統一的に見えるようになったというようなことがある」とし、その統一する視点が「全て基本的には幻想領域である」[10]という点にほかならないとしている。幻想領域だと考えるときに、初めて統一的な視点が得られるとする、いわば思想的な重量がこめられているのである。

そしてこの全幻想領域には三つの次元の異なる構造が含まれており、それらを峻別し、それらの構造や連関を明らかにすることができれば、解明が進むとしている。三つの次元の異なる構造として措定されるのが、国家、法、宗教といった領域の問題となる共同幻想、芸術理論や文学理論といった領域の問題となる自己幻想、さらに家族論や男女関係といった領域の問題となる対幻想である。これらの三つの幻想領域は次元の相違として存在しており、混同するわけにはゆかない。こうした三つの軸の「内部構造と、表現された構造と、三つの軸の相互関係が

どうなっているか、そういうことを解明していけば、全幻想領域の問題というものは解きうるわけだ、つまり解明できるはずだ[11]」とするのである。

あとでまた触れるが、幻想という表現自体はマルクスから借用したものであり、吉本の勝手な造語というわけではない。マルクスは、例えば「ドイツ・イデオロギー」で国家（政治的国家）に対して「幻想の共同体」illusorische Gemeinschaftlichkeit という表現を使っている。しかし、マルクスが幻想という語を使って政治的国家を指すとき、国家は止揚されるべき対象、真正のものではない擬制として描かれている。吉本がこれに影響を受けて、共同性の観念に対して幻想（共同幻想）とすることには、このコンテキストでは違和感があるわけではない。しかし、対の観念や自分自身に対する観念についてまで、幻想という表現を当てはめるのは、誤解を招くおそれがある。やはり幻想という表現は、共同幻想についてのみ当てた方が一般的だろう。つまり、対幻想や個人幻想については幻想ではなく観念とした方がよい。共同幻想は明らかにイリュージョンの側面が強いわけで、廃絶されるべきものと考えられているが、対幻想や個人幻想はイリュージョンとはニュアンスがちがう。

山口昌男は「幻想・構造・始原――吉本隆明『共同幻想論』をめぐって[12]」のなかで、幻想を観念と理解したうえで、共同幻想と個人幻想（自己幻想）という構図は、既にデュルケムによって集合意識（集合表象）と個人意識（個人表象）という構図で提出されており、決して新しいものではないとして、その独創性に疑義を呈している。山口のこの論文は、吉本の他の著作、たとえば『言美』や『心的現象論序説』を読んだうえで書かれたものとはおもわれないので、十分な理解が行き届いているとはいえないが、しかし、『共幻』だけを読んで率直にその印象を語ったものと考えれば興味深いところが見えてくる。

たしかに、デュルケムは個人意識に対する集合意識の異質性、優越性、豊饒性といった概念を使い、集合意識を個人意識の総和に還元しきれない独自な領域として措定してみせた。吉本が共同幻想を個人幻想に対して独自

の領域として設定したこと自体は形式的には類似する。（だが、それをいうなら一般に「全体と個」という問題構図は古くからあり、その意味では何もデュルケムなどを引き合いに出さなくても事足りる。）しかし、類似点はこうした形式性だけで、内実はまったく異なる。実際、デュルケムは集合意識の優越性、豊饒性を介して保守主義に接近するのに対し、吉本にとって共同幻想は廃棄の対象である。あるいはまた、吉本が共同幻想と個人幻想との連関を、その内部構造に立ち入って論じているのに対して、デュルケムは壁画的にその特質を外部から列挙して違いを述べたにとどまる。要するに論じられている次元が違うのである。

さらに対幻想の問題がある。この概念を共同幻想と個人幻想に絡めて、それらの連関を問い、論じたところにこそその独創がある。もちろん対幻想の概念の案出に当ってヘーゲルやマルクス[13]、さらにはフロイトからの影響があるだろう[14]。単純にその意味では独創とはいえないことになる。しかし、こうした云い方をしてしまえば、吉本に限らず、およそ独創などというものは存在しないことになる。思想の継承とはそういうものであり、累積された思想の全体に対して、新たな一枚をつけくわえるところにこそ、独創が存在する。山口は「わたしのまえにわたし以外の人物によってこのような試みがなされたことはなかった」という『共幻』序の一文を揶揄しているが、しかし私は何の衒いもなしに、この言葉を受け入れてかまわないとおもう。確かに、こうした捉え方をした思想は存在しなかったようにおもえるからだ。

三　方法としての「自然」

『共幻』は、あたりまえだが、共同幻想についての論究である。この著作の主題について次のように書かれている。

「国家は共同の幻想である。風俗や宗教や法もまた共同の幻想である。もっと名づけようもない形で、習慣や民俗や、土俗的信仰がからんで長い年月につくりあげた精神の慣性も、共同の幻想である。人間が共同のし組やシステムをつくって、それが守られたり流布されたり、慣行となったりしているところでは、どこでも共同の幻想が存在している。そして国家成立の以前にあったさまざまな共同の幻想は、たくさんの宗教的な習俗や、倫理的な習俗として存在しながら、一つの中心に凝集していったにちがいない。この本でとり扱われたのはそういう主題であった[15]」

ここで「一つの中心」とは共同幻想としての国家を指す。吉本の思想にはマルクスの思想的影響が圧倒的であり、先にも述べたように、それは共同幻想としての国家という捉え方にもあらわれている。吉本はこの著作で国家本質論を試みているのだ。共同幻想としての国家という視点が自らに与えた衝撃について、吉本は次のように語っている。

「わたしが驚いたのは、人間は社会のなかに社会をつくりながら、じっさいの生活をやっており、国家は共同の幻想としてこの社会のうえに聳えているという西欧的なイメージであった。西欧ではどんなに国家主義的な傾向になったり、民族本位の主張がなされるばあいでも、国家が国民の全体をすっぽり包んでいる袋のようなものだというイメージでかんがえられてはいない。いつでも国家は社会の上に聳えた幻想の共同体であり、わたしたちがじっさいに生活している社会よりも小さくて、しかも社会から分離した概念だとみなされている[16]」

このような観点から、国家をもう一度、本質論的に見直してみる試みを吉本はおこなう。この著作で、吉本は『遠野物語』と『古事記』に拠りながら、日本の古代国家の形成について論じている。国家の本質というとき、

共同幻想の極限であるところに求められている。典拠からもわかるように、これは実証的な著作ではない。共同幻想としての国家がどのようにして出現するかについての原理的な考察である。国家は共同幻想の極限と考えられているわけだから、共同幻想一般を取り扱ったものということもできる。（というより、そのようなものとして読まれることが期待されており、しかるがゆえに、現在においてもアクチュアリティを有する。）

マルクスの影響は自然史的な方法にもあらわれている。『共幻』でもこの方法が使われているようにおもえる。この著作で、吉本が対象としたのは文字などが成立する以前の太古である。ここに踏み込むに際して、手がかりとなるのは想像力と方法だけだ。現代人の思考や感性でこの対象に立ち向かうことはできない。吉本自身は、このふたつの文献を資料として読むに当たって「『遠野物語』にも『古事記』にもそれぞれ編者たちの問題意識の自然なあらわれとしてそれぞれの〈方法〉がつらぬかれている。そしてこれらの〈方法〉は、わたしの問題意識とはちがっているため、記載された内容について重点のおきかたが当然ちがっている。そのため引用にさいしては、わたしの問題意識にそって要約や読解や勝手な引用がなされた。ただし改ざんされていることはない[17]」と断っている。吉本は自らの問題意識にしたがってこれらの「資料」を読み込むことを宣言しているのである。

これに対して、牽強付会で勝手な読み込みだとする批判がなされる余地が出てくる。たとえば、田川建三は「「共同幻想論」という「理論」は素材として用いられた『遠野物語』とはまるでかみあっていないのだ。それどころか、『遠野物語』をまるで誤読したり、素材の内容と無関係のレッテルを切ったり貼ったりする手品的な操作によって強引に「共同幻想論」という我田に水を導いているのである[18]」と批判している。だが、「手品的な操作」かどうかは、そのように読み込めるかどうかという読解力の差、想像力の差としか云いようがないところがある。すると問題は、吉本の「問題意識」であり「方法」であるということになる。

『共幻』では「人間にとって共同の幻想とはなにか、それはどんな形態と構造のもとに発生し存在を続けてゆ

くか」[19]を、その起源（初源）つまり原始的（未開的）な共同の幻想の解明からはじめ、「〈国家〉の起源の形態となった共同の幻想までたどりついたところで考察は終わっている」[20]。その考察は一定の方法に基づいている。その方法をひと言で云うならば、より遠隔にあるものを志向していくという、観念（幻想）の自然の性格、吉本の用語を使えば観念の遠隔対象性（遠隔対象志向性）であり、それを下敷きにして、観念（幻想）領域を探り、その極限を共同幻想としての国家に見たのである。観念の遠隔対象性（遠隔対象志向性）という自然的性格を理解していないと、『共幻』の方法はうまく理解できない[21]。そしてまた、次節であつかう個人幻想と共同幻想の逆立という事態、さらには共同幻想の廃棄といった課題も、方法として使われている観念の自然的性格を勘定に入れていないと理解できない。

四　個人幻想と共同幻想の逆立

吉本隆明によれば個人幻想と共同幻想は「逆立」するとされるが、「逆立」とはどのような意味か。確かに『共幻』の重要な概念として使われているのに、この著作の中では充分な説明がなされてはいない。「原理的にだけいえば、ある個体の自己幻想は、その個体が生活している社会の共同幻想にたいして〈逆立〉するはずである」[22]といったように、自明のことであるかのように語られている。そこで、後につなげるため、私が以前この概念について論じた箇所を転用しながら話をすすめる[23]。

対幻想がある個人と他の個人との関係から疎外される観念であり、その関係をつかさどるものは「性としての人間」であるのに対し、共同幻想は三人以上の人間の関係から疎外される観念である。なぜこのように区別されなければならないのか。もちろん、これまでみてきた範囲でいえば、対幻想が「性としての人間」という範疇か

ら生み出されることにある。だが、これは別の視点からも云える。対幻想は対手が消失すれば消失するが、共同幻想はひとりが欠けたとしても消失するわけではない。つまり、対幻想が個人（性としての人間）のもとにおかれているのに対し、共同幻想は個人から独立した観念領域を形成しているということができる。これは、共同幻想の方からみれば、個人はその具体性においてではなく――つまりありのままにではなく観念的にこの共同幻想に絡むことを意味する。そして、この観念的に絡んでいるにもかかわらず、それを現実であるかのように錯視するのだ。この間の事情を吉本は自己幻想と共同幻想の「逆立」という表現を使って述べている。

「〈個人〉の心的な世界がこの〈社会〉の心的な共同性に向かう時は、あたかも心的な世界が現実的なもので、具体的に日常生活している自分は架空のものだという逆立によってしか、〈社会〉の心的な共同性に向かうことができないということである。いいかえれば、〈個人〉は自分が存在しているしかたを逆立させることによってしか、〈社会〉の心的な共同性に参加することができない。この関係は、人間にとって本質的なものである」[24]

「それゆえ、〈社会〉の共同性のなかでは、〈個人〉の心的な世界は〈逆立〉した人間というカテゴリーでだけ存在するということができる。そして、この〈逆立〉という意味は、単に心的な世界を実在するかのように行使し、身体はただ抽象的な身体一般であるかのように行使するというばかりでなく、人間存在としても桎梏や矛盾や虚偽としてしか〈社会〉の共同性に参加することはできないということを意味している。〈社会〉の共同性のなかでは、〈個人〉は自分の労力を、心情を、あるいは知識を、財貨を、権威を、その他さまざまなものを行使することができる。しかし、彼（彼女）が人間としての人間性の根源的な総体を発現することはできないのだということは先験的である。この先験性が消滅するためには、社会の共同性（現在ではさまざまな形態をとった国家とか法とかに最もラジカルにあらわれている）その

ものが消滅するほかはないということもまた先験的である」[25]

「逆立」が単に共同幻想の極限としての国家だけではなく、共同幻想と自己幻想の一般的関係として語られている。『共幻』ではそのことが次のようにはっきり述べられている。

「ここで〈共同幻想〉というのはどんなけれん味も含んでいない。だから〈共同幻想〉をひとびとが、現代的に社会主義的な〈国家〉と解しても、資本主義的な〈国家〉と解しても、反体制的な組織の共同体と解しても、小さなサークルの共同性と解してもまったく自由であり、自己幻想にたいして共同幻想が〈逆立〉するという原理はかわらない。またこの〈逆立〉がさまざまなかたちであらわれるのもかわらないのである」[26]

そして、こうした文だけを読むと、あらゆる共同性を目の敵にしているといった単純な理解をまねくことになる。田川建三は、こうした吉本の文章が受け入れられるのは「現代社会において非常に多数の人々が、集団（共同性）と個人は対立する、もしくは相容れない、と考えている、ほとんど確信している、その感覚をそのまま表現しているから」[27]であり、特に「戦中派から戦争直後派の多数の人々がものを考える場合に基本に置いていた感覚である」[28]としている。もちろん、吉本は戦中派に属するが、この世代の人々は戦時下のファシズムによる集団的強制を体験しており、「だから、この人々は集団性を本能的に強制、統制、個性の抹殺としてとらえてしまう」し、「集団は個人と対立するものだ、という彼らの信念は、従って、理屈を越えた、ほとんど宗教的とも言える確信となっている」[29]というのである。要するに共同性に対する怨嗟が最初にあり、逆立というのもその怨嗟から導き出されたものであり、なんら理論的なものではない。否、理論的なことを云うならば、むしろ逆立しないと

いうべきなのだ。すなわち、「そもそもその存在の形成において個体の質は共同体によって作られるのであるから、個体の存在そのものが共同性の質である、と言ってよい。本質において個体と共同性が「逆立」するはずがないのである」[30]。

ここには理解を超えたことが書かれている。自分自身の体験をもとにした「ほとんど宗教的とも言える確信」の理論づけをしているだけだと本気で考えているとしたら、一つの本格的な思想の成り立ちをあまりにもあまく見すぎているし、吉本に対しても見くびりすぎだ。また、「そもそもその存在の形成において個体の質は共同体によって作られる」云々などということもあたりまえのことであって、マルクスを徹底的に読み込んでいる吉本が、人間の全体的性格などを知らないわけがあるまい[31]。いや、マルクスなど引き合いに出すまでもなく、個人が共同性によって育まれることなど自明のことだ。いま共同幻想というとき、明らかに次元のちがうことを云っているのである。

田川は何を云いたいのか。人間は共同性に取り囲まれている。その全ての共同性を桎梏と考える、あるいは共同性自体を悪とみるのはおかしいのではないか、という素朴な疑念がこの批判の根本にある。こうした批判は小浜逸郎などにも継承されている。小浜は云う、吉本は「共同幻想自体が消滅しなければならぬ」というが、「私たちは、それらの消滅の課題を果たした暁にどんな人間や社会のイメージを手にいれられるというのか。吉本は、法にせよ、制度にせよ、すべて社会的な関係をコントロールする秩序形態をも含めて「共同幻想」と呼んだのであるから、それらが「消滅しなければならぬ」という理念つまり吉本の設定した軸にしたがうなら、「個人幻想」と「対幻想」だけが生き残ってゆくべきだという理念は、あまりに空想的というほかはない。（中略）問題はすべての共同幻想が「消滅する」ことではなく、人間が不可避的に生み出してしまう共同幻想のうち、どういう質と形態が、現在および未来の人間の生にとってできる限り適合的であるかを見出してゆくことであろう」[32]。

確かに吉本は共同幻想はすべからく廃棄されるべきだと語った。共同幻想に望ましいも、望ましくないもないのであって、「逆立」するという原理は変わらないとする。私たちが常に共同幻想を桎梏としてとらえるとは限らない。親和（同調）している場合だってありうる。そんなことは、吉本は折り込み済みだ。[33]

そもそも吉本は幻想共同体としての国家というマルクスの思想に衝撃を受け、そこから自らの議論を展開したことをここでもう一度想起しよう。「共同幻想」論は基本的にマルクスの思想・方法を継承しながら、観念の領域にそれを適用していこうとするものであった。

マルクスによれば、社会的分業は必然的に特殊利害と共同利害の矛盾を引き起こし、「まさに特殊利害と共同利害とのこの矛盾のために、共同利害は国家として現実的な個別利害からも現実的な全体利害からもきりはなされてひとつの独立した姿をとるのであり、同時にまたそれは幻想の共同体として独立した姿をとるのである」。[34]そしてこの幻想の共同体は、諸個人にとって疎外態としてあらわれることになる。すなわち「諸個人はただ、かれらにとってかれらの共同利害とは一致しない特殊利害だけを追求するからこそ、またおよそ普遍的なものは共同性の幻想的な形態にすぎないからこそ、この普遍的なものはかれらにとって『疎遠な』、かれらから『独立』したそれ自体やはり特殊かつ独自な『普遍的』利害としてあらわれるのである。あるいは民主制のばあいにそうであるように、かれら自身こうした孤立状態においてうごかざるをえない。したがって他面では、共同利害および幻想上の共同利害にたいしてたえず現実的に対立してあらわれるもろもろのこうした特殊利害の実践的闘争は、国家の姿であらわれる幻想上の『普遍的』利害による実践的な干渉と制御を必要ならしめる」[35]のである。

ここで注意すべきは、こういった一連の過程が自然成長的な過程として捉えられていることである。自然成長的な過程にゆだねてしまえば、こうした疎外態が招来されるということである。「分業はただちにつぎのことについての最初の実例をわれわれに提供してくれる。すなわち、人間たちが自然成長的な社会のうちにあるかぎり、

したがってまた特殊利害と共同利害との分裂が存在するかぎり、だからまた活動も自由意志的にではなく自然成長的に分割されているかぎり、人間自身の行為はかれにとって疎遠な、対抗的な力となり、かれがこの力を支配するかわりにこの力がかれをおさえつけることの最初の実例を提供する」[36]。逆にいえば、こうした分業の自然成長的なあり方を脱却し、自由意志的な活動を取りもどすことができれば、疎外を止揚することができるとされるのである。

マルクスは幻想共同体としての国家について、いわば外側から語ってみせ、廃棄の道筋をつけて見せた。吉本はこれに対して、観念の内部構造から幻想共同体としての国家を解明しようとした。そして、そこで採られている方法は観念の自然的性格としての遠隔対象性（遠隔対象志向性）である。この方法にもマルクスの影響が顕著に現われている。自然史的な方法は、『資本論』などを見ればわかるように、マルクスの著作の根幹におかれているものである[37]。『共幻』においてこの観念の遠隔対象志向性が自然史的な方法の位置にあたる。文字も定かでなく、残されたものは神話と民譚だけという世界に入り込む時に、よすがとすることができるのは方法だけだ。私たち現代人の感性で、こうした世界を解明できるとするのはそれこそ幻想でしかない。この方法を武器に、吉本は『共幻』で最初の共同幻想としての国家までを論じて見せたのだ。

ある鼎談で、吉本は現代の場面を想定して〈逆立〉について簡明に語っている。共同幻想の最小単位は三人である。いま三人集まって同人雑誌をつくることにし、会費として一人あたり月千円集めることに同意した。しかし、そのうちの一人が事情があってこの千円が払えなくなったとすると、この個人にとっては、「自分も参加して取り決めた三人の規則っていうのは重荷になって」[38]くる。また残りの二人からすれば、この一人は「取り決めだけに照らしていえば」もうそのグループではないことになる。これはいうまでもなく、国家と個人といった関係にまで引き延ばすことができる。「国家でいえば、法に照らしてだけいえば、もう、法にはずれたんだ」[39]となる。

「共同の取り決め、国家のなかでの個人っていうのは、本当は、自分も暗黙のうちに同意して国家の法律っていうのはできているんだけど、じぶんがそれを守れなくなったら途端に共同で取り決めたそれと、個人の精神性とは違和感をもつようになって、もっと極端になれば、反対に否定的になっちゃう。だから、ぼくは、共同幻想というものと個人の幻想というのは元来が逆立するもんなんだというふうにかんがえた」[40]。とはいえ、個人幻想と共同幻想が違和感をもたずに接続されているようにみえる（感じられる）こともある。通常はこちらの方が一般的であり、一種の違和感ないし同和感としてあるというだけであり、逆立まではいかない。だが「とことん押し進める事態がやってきてしまえば逆立してしまう」[41]のであって、これを本質ととることができる。すなわち「一番本質的に規定して、この二つは逆立する本質をもっているととれば、全部包括されるだろう、違和感もそのなかに包括されるし、違和感がゼロっていう意味あいでとれば同和感っていうのもそのなかに含まれるとかんがえていい」[42]のである。

吉本は共同幻想を否定するが、共同性を否定しているわけではない。微妙な云い回しになるが、共同幻想は自然成長的な過程において必然的に生み出されてくるものである。逆にいえば、常にそれに対して自覚的でなければならず、絶えずそれを廃棄するような在り方をしなければならない、ということになる。自由な個人による連帯という考えが否定されているわけではない。吉本が党派性の論理（共同幻想！）を超えるために「自立」を主張したのはここによっている。マルクスは共産主義に対して、「共産主義とは、われわれにとって確立されるべきなんらかの状態、現実をそれに適合させる［richten］べきなんらかの理想ではない。われわれが共産主義と名づけるのは、いまの状態を廃棄する現実的運動である」[43]とする定義を与えた。労働すなわち自己対象化を通しての自己産出行為は人間の本質的営為であるが、この営為はこれまで自然成長的におこなわれてきた。人間の自然成長的在り方においてはこの労働が、観念の世界においても疎外された観念として現われ、また経済の領域にお

いても分業を介して疎外として現われる。だからこそこの自然成長的在り方を自覚的な在り方へと転換させることをマルクスは強調することにもなったのである。この不断に自然成長してゆく在り方を絶えず自覚的な過程へと転換させ人間本来の在り方に戻そうとすること、この永遠の運動が共産主義に他ならない。吉本が共同幻想の廃棄をいうなら、こうした永遠の運動の相においてであろう。

（1）「吉本隆明の初期思想（一）」『法学研究』第七七巻第七号（二〇〇四年七月）所収、「吉本隆明の初期思想（二・完）」『法学研究』第七七巻第八号（二〇〇四年八月）所収。

（2）『共同幻想論』改訂新版、角川文庫、一九八二年（以下『共幻』）、一六頁。

（3）この著作の「原理性」とでもいうべきものに対しては、批判が向けられることも多い。例えば、田川建三は、『共幻』は理論に合うように素材をつなぎ合わせたにすぎないと批判している（田川建三『思想の危険について――吉本隆明が辿った軌跡』インパクト出版会、一九八七年八月）。小浜逸郎も同じように、『共幻』は既に吉本の頭の中でできあがっていた共同幻想、対幻想、自己幻想の峻別という「原理」を、資料としての『遠野物語』や『古事記』に無理やり当てはめて読み解こうとするから、論理的に破綻してしまっており、このようなムリをおかすくらいならなぜ「原理」の方が間違っているという考えに及ばないのかと批判をくわえる。なお、小浜は『共幻』以前の論文では、三幻想を主張してはいても、無理やり体系化などは試みておらず、破綻はしていないとしている（小浜逸郎『吉本隆明――思想の普遍性とは何か』筑摩書房、一九九九年、一七二頁）。

（4）この問題については拙稿「政治権力批判の視座」（所収『政経研究』日本大学法学会、第三九巻第三号）で取りあげている。

（5）『共幻』三九頁。

（6）吉田裕『幻想生成論』大和書房、一九八八年、七三頁。

（7）特に（二・完）の第四章「幻想領域の基軸」参照。

（8）『共幻』二四頁。

（9）　同前　二六頁。
（10）　同前　二四頁。
（11）　同前　二五頁。
（12）　山口昌男「幻想・構造・始原――吉本隆明『共同幻想論』をめぐって」、所収『人類学的思考』せりか書房、一九七一年。
（13）　例えば、対幻想の中でも空間的な拡大に耐え共同幻想に結びつけられるのは兄弟＝姉妹間の対幻想だとしているが、その示唆はヘーゲルから受けているし、またマルクスの『経済学――哲学手稿』から「人間対人間の直接的・自然的・必然的関係は男性対女性の関係である」といった言葉を引用してもいる。『共幻』及び「性についての断章」（一九六四年五月、所収『吉本隆明全著作集4』勁草書房、一九六九年）。
（14）　思想史のうえで性としての人間という概念を主題化してみせたのはフロイトだ。フロイトの思想に対する評価は『心的現象論序説』に詳しいが、『共幻』冒頭の「禁制論」でも触れられている。吉本はフロイトのタブー（禁制、Tabu）論について次のように要約する。一般に禁制の対象となる事象は、〈願望〉の対象でありながら〈怖れ〉の対象でもあるという両価性をもっており、「おおくのばあい、怖れの対象であるという側面は、（略）心の前景におしだされるが、怖れの対象そのものが同時につよい執着や願望の対象でもあるという側面は心の奥のほうにしまいこまれる」（『共幻』四〇頁）。吉本は如上のようなフロイトのタブー論を基本的には承認するが、対幻想の領域にあるはずのものを無造作に共同幻想の領域に広げていってしまったという点では批判を加えている。「人間の〈性〉的な劇の世界は、個人と他の個人とが出遇う世界に属するもので、たんに個体に固有な世界ではないとかんがえるべきである。そしてこのフロイトの指している心の世界は〈対なる幻想〉の世界とよぶことができる」（同前、四三頁）のだが、対幻想の次元と共同幻想の次元を区別しないために混乱が生じている。例えば、近親相姦に対する〈性〉的な禁制（これは対幻想の問題である）から王や族長に対する〈制度〉的な禁制（これは共同幻想の問題である）を無造作につなぎあわせてしまうのである。
（15）　『共幻』七頁。
（16）　同前　六頁。
（17）　同前　二六五頁。

（18）田川建三前掲書、一八二頁。吉本自身はこうした批判に本気で対抗していない。ただ次のように語ったのみ。「田川建三や桜井哲夫などは、わたしの主要な著作に何ひとつまともに当らず、はじめからわたしの『「反核」異論』やエコロジスト批判が気に喰わないという心情をうらづけるために、ただクサスという目的で講演集のなかから、都合のいい文句を取り出してきてつなぎあわせ、勝手に頭の中でこしらえたわたしの「変質」を立証したなどと称して本を一冊作っている。田川建三がじぶんの本の低俗さに気づかないとしたら、もう救いようはないんだ。かつて『マルコ福音書』（上）の優れた先駆的な仕事をした聖書学者田川建三はどこへいったんだ。いまはスターリニストの操作に口裏をあわせて、わたしの著書に本気でぶつかりもしないで、ただクサす効果だけをねらって物を書くようになってしまった。悲しいことだよ」（『情況へ』宝島社、一九九四年、三〇五頁）。

（19）『共幻』三八頁。

（20）同前　二六五頁。

（21）観念の遠隔対象（志向）性については、拙稿「吉本隆明の初期思想（二・完）」の第四章第二節「観念の自然的性格」を参照。

（22）『共幻』一三六頁。

（23）拙稿「吉本隆明の初期思想（二・完）」一〇一―一〇二頁。

（24）吉本隆明「個人・家族・社会」一九六八年七月、所収『吉本隆明全著作集4』四六五頁。

（25）同前。

（26）『共幻』一三六頁。

（27）田川建三前掲書、一六五頁。

（28）同前　一六六頁。

（29）同前。

（30）同前　一六八頁。

（31）誰でも知っているマルクスの一文を挙げておく。「フォイエルバッハは宗教的なものを人間的なものに解消する。しかし人間的なものとはけっして個々の個人に内在する抽象物ではない。人間的なものとは、その現実性においては、社会的諸関係の

総和（ensemble）である」（「フォイエルバッハについての十一のテーゼ」（高島善哉・他訳）、所収『マルクス　経済学・哲学論集』河出書房、一九六七年、一九六頁）。

（32）小浜逸郎『吉本隆明論』一八一―一八二頁。

（33）この点について、『共幻』では次のように述べられている。「原理的にだけいえば、ある個体の自己幻想は、その個体が生活している社会の共同幻想に対して〈逆立〉するはずである。しかしこの〈逆立〉の形式は、けっしてあらわな眼にみえる形であらわれるとかぎっていない。むしろある個体にとって共同幻想は、自己幻想に〈同調〉するものにみえる。またべつの個体にとって共同幻想は〈欠如〉として了解されたりする。またべつの個体にとっては、共同幻想は〈虚偽〉としても感じられる」（『共幻』一三六頁）。

（34）マルクス（エンゲルス）「ドイツ・イデオロギー」（中野雄策訳）、所収『マルクス　経済学・哲学論集』河出書房、一九六七年、二二二頁。

（35）同前。

（36）同前　二二二―二二三頁。

（37）マルクスは『資本論』第一版序文で次のように書いている、「起きるかもしれない誤解を避けるために一言しておこう。資本家や土地所有者の姿を私はけっしてばら色の光のなかに描いてはいない。しかし、ここで人が問題にされるのは、ただ、人が経済的諸範疇の人格化であり、一定の階級関係や利害関係の担い手であるかぎりでのことである。経済的社会構成の発展をひとつの自然史的過程と考える私の立場は、他のどの立場にもまして、個人を諸関係に責任あるものとすることはできない。というのは、彼が主観的にはどんなに諸関係を超越していようとも、社会的には個人はやはり諸関係の所産なのだからである」（第一巻第一分冊、マルクス＝エンゲルス全集刊行委員会訳、大月書店、一九六八年、傍点は引用者）。この自然史的過程という方法は吉本にも共通するものである。観念の領域において自然史的過程を問題にするとき、遠隔対象性（遠隔対象志向性）という概念が導きいれられている。小浜逸郎は、吉本が「情況とはなにか V」と題する文章で遠隔対象性に言及しているところを捉え、「吉本が自分で立てた前提に解決がつかなくなって「遠隔対称（対象？）性」なる苦しい論理を編み出した」（小浜前掲書、二一五頁）といっているが、この考え方は遥か以前「マチウ書試論」などにもはっきり出てきている（というよりこれが理解

できなければ「マチウ書試論」自体が理解できない）考え方であって、苦し紛れに編み出した即興概念ではない。

（38）吉本隆明『ミシェル・フーコーと『共同幻想論』』（中田平との共著）丸山学芸図書、一九九九年、六三頁。

（39）同前　六四頁。

（40）同前　六五頁。

（41）同前　六六頁。

（42）同前　六六頁。

（43）マルクス（エンゲルス）「ドイツ・イデオロギー」（中野雄策訳）、二二五頁。